



茶摘歌四編 上

光文書

13
1306
4



表 13
1306
4

未掲花回編の叙

予の六の冊子に見えしは、
此の編を撰つた人、
古風な趣向を
持て、
一物本末を
叙し、
其の趣向を
叙す。

此の書は... 解く... 九年... 壁の... 達
 摩... 十年の... 編... 著... 備... 見
 の博覧... 人物... 本... 著... 著... 著...
 この... 遠... 借... 著... 著... 著... 著...
 化小東... 式... 始... 滑... 著... 著... 著...
 道の... 延... 世... 住... 小... 松... 帳... 著... 著...
 鬼... 鬼... 住... 小... 松... 帳... 著... 著...

冊子... 稱... 美... 居... 好... 好... 好... 好...
 十... 外... 外... 外... 外... 外... 外...
 偏... 偏... 偏... 偏... 偏... 偏...
 文... 華... 梅... 梅... 梅... 梅...
 幸... 世... の... 如... 是...
 人... 志...



新羅林
後西院御製



東都

閑情末摘花第四編卷之上

東都 松亭金水編次



第十九回

八幡大菩薩。本邦擁護の宗廟。あて上一人より下
万民のゆるるまで。は。傾け家内安全息災を祈る
應。七宝。演あり。まが。第一。八宝。の宮。カニ。山城。男。山。吏
より。後。を。深。倉。の。鶴。岡。八。幡。宮。江。戸。の。巽。小。の。名。を。豊。ら
ありける。室。が。八。珠。小。繁。華。の。土。地。中。七。娼。家。ハ。新。と。る。へ。て

糸竹の音^とを^と唄^{うた}女^を八^は紅^{くわう}の^の裳^も裾^{すそ}を^をひる^ひぐ^ぐ客^{きやく}の^の指^{さし}
しふ^し意^い七^{しち}山^{さん}へ^へ来^きる^るを^を入^いる^る山^{さん}の^のね^ねど^ど石^{いし}橋^{はし}の^の洞^{どう}の^の
入^いる^る夏^{なつ}を^を平^{へい}平^{へい}と^との^の茶^{ちや}坊^{ばう}ハ^ハ
料^{りやう}の^の献^{けん}ま^ま新^{しん}を^を一^{いつ}奇^きを^を巧^{くわう}と^とま^まぐ^ぐ東^{とう}都^との^の第^{だい}一^{いつ}二^に
と^とま^まぐ^ぐ這^この^の亭^{てい}の^の居^いる^る實^{まこと}六^{ろく}年^{ねん}齡^{れい}入^い十^{じゅう}層^{そう}の^の邸^{てい}客^{きやく}在^あり
所^{ところ}在^ある^る殼^かを^を出^いさ^さ存^{ぞん}せ^せ獨^{ひとり}酒^{しゆ}の^の邊^へを^をま^まり^りて^て人^{ひと}待^{まち}て^てび^びら^らを^を
ま^まり^り所^{ところ}へ^へ急^{いそ}ぎ^ぎ足^{あし}を^を知^しる^るま^まり^りく^く見^みせ^せと^との^の亭^{てい}へ^へ
来^きる^る人^{ひと}の^の縫^{ぬい}針^{はり}を^を之^{これ}の^の叔^{おや}茶^{ちや}坊^{ばう}の^の女^をの^の案^{あん}内^{ない}に^にさ^されて^て

ま^まり^りと^と這^こ入^いる^る腰^{こし}と^とも^も太^お助^{すけ}ハ^ハイ^イヤ^ヤコ^コリ^リヤ^ヤ津^つ原^{はら}と^とぞ^ぞん^んど^どま^まり^りて^て
白^{しろ}羽^う根^ね町^{まち}で^でお^お目^めの^のり^りり^り桐^{とう}生^{せい}の^の福^{ふく}富^ふや^や万^{まん}右^えら^らま^まる^る見^みま^まり^り
僅^{わずか}か^か一^{いつ}人^{ひと}で^でお^お樂^{らく}と^とま^まり^りて^て太^お助^{すけ}さん^{さん}様^{さま}ら^ら
早^{はや}く^く来^きて^て下^{くだ}ま^まり^りて^てま^まり^りく^くけ^け方^{かた}へ^へ太^お助^{すけ}さん^{さん}様^{さま}ら^ら
急^{いそ}ぎ^ぎ用^{よう}の^の籠^{かご}を^をま^まり^りて^て福^{ふく}富^ふと^とま^まり^りの^の急^{いそ}ぎ^ぎ今^{いま}津^つ原^{はら}と^と一^{いつ}向^{むか}
角^{かく}の^の人^{ひと}達^{たち}の^のま^まり^りて^て存^{ぞん}じ^じの^の急^{いそ}ぎ^ぎ使^{つか}の^の男^{おとこ}が^がお^おも^も
松^{まつ}の^の相^あ違^{ちが}ひ^ひの^の急^{いそ}ぎ^ぎま^まり^りて^て救^{きう}を^をま^まり^りて^てま^まり^りて^てお^おも^も
使^{つか}と^と一^{いつ}所^{ところ}の^の急^{いそ}ぎ^ぎま^まり^りて^てま^まり^りて^て早^{はや}く^くの^の急^{いそ}ぎ^ぎお^おも^も

ちさう 對空 萬石の 稼さう 寄せ 万 廿一 割一 といひ
他でも 兼て お茶も 相決し 嫁女の 一件の 喜倍も 二人の
婿と 七 梅と 小丸が 婿と 女も 直に 嫁さる せは 終る
考と 見ゆ 所米 決り 鉢寄 といひ 茶の 口は 終る
いでも 丸で 系 梅へ あり お里と 女児も 在り といふ
疑が 見て 見ま 限り も 角の と 左 陸と といひ 終る
断る といふ 見接 といふ 喜倍が 眼力 三 見と 米 決り
お里と 喜倍の あり といふ お里と 茶の 姪と といふ 不 終る

お茶と 米 決り 仕組 所 といふ といふ といふ といふ
りま 上 國屋と といふ 太助の 婿 頼り といふ 終る
交と 曉つて といふ 又 謀 早の 眼茶の 利潤 といふ 終る
神明の 四 財を といふ 三社の 託宣 あり 通る 定めて 終る
米 決り 喜倍の 婿と 女も 直に 嫁さる せは 終る
お茶が 家出 といふ 今も 一向 終る 方へ 喜倍 備ま 万 一身 終る
る 首で 横門 といふ 見ゆ あり 喜倍が 併公 とも 終る
ちさう 喜倍の 婿へ 出て 見ま といふ 喜倍の 婿と 終る

智がかしらうもあはだ。これすなはちんんぬ。夫が別神明の心算をせむと
 計りて。あつらうらうらうと吾等の娘が不許存はまう。死も甘んじと
 馬のて今日まへに橋をたてて。いよくお松方が腹を合して左根
 さきうらひと園をたつて。もとのまへに捨つておねえさまをさうら
 加縣所へ逃げて女児がむ方早うおねえさま安快をねて。姑の
 容ふ引くえて。歯を切し悔い涙をうらぐと。あつらうらうと。脱走人と
 まる威勢が太助のちと。はまきまされ身を縮すと。侍人すの穿
 木下まの腹をたむ。今更らうと。さうやうも。どぶのまをんが。その

都合をお祈へ成す。七の実は難を米次希するが。は作めぬ。叙
 父の女児を養ひて。嫁のせぬや。海方の田舎育の不思議
 の。お松うと。新へ。ひまどと。まて。亦叙の。後。渡の。仲。一。通。で。得
 かせぬ。お松。遠。旅。り。て。く。と。折。入。て。の。お。特。々。ゆ。お。甥。の。之。活。り。が
 目まら。は。園。の。あ。る。且。那。の。こ。こ。に。得。小。松。も。も。中。さ。れ。ど。け。旅。の。お
 ね。え。さま。に。あ。は。れ。さ。う。あ。ら。う。び。受。入。合。て。虚。言。を。実。と。言。終。ら。う。見。も。か
 つも。せぬ。女。児。を。己。の。姪。と。名。を。つ。け。その。田。舎。や。ら。ひ。体。容。根。が。正
 直。な。お。松。に。園。用。を。せ。た。ま。は。し。る。一。つ。も。も。く。尻。尾。を。か。く。お。松。の。い



三田郡といふが格別の凶劫年で此所への一匹の四又目以猶憶
下さのまう久治りもその始末を具し一七人をも存
たてりてもお後まの行方を探し出ませうと願の行を杖
が酒も醒ても夜更まで真青のあり内を老丈想像さ
痛まければ仕方ハ女思を亡くするその思のやうせられ
既を左衣うち揮て万イヤか特々やまうり人吾侪も思の
たう如在るく見まをり方ハ探しつけまど。おまぬふよつて
を揉まけか縣所ハ威勢で尋ねらるゝおませう。又

おまその内ハト言拂つてまを引とる。猶さぬぐハ任言されば
衝の顔を知りげ万ハまむごまぬ言らるゝおまを可ぬと
りも大人もるのまのりハ縣所ハの体へまぶす背見合
やうがまの胸と枝内でおまの特々いひひがある。おまを業か
あて呉るまらう。おまの夜々存せんが身も支惚つて
おまのちうともおまのまやう万ハりひくまの遠ののま跡で
おまのちうともおまのまやう万ハりひくまの遠ののま跡で
おまのちうともおまのまやう万ハりひくまの遠ののま跡で
おまのちうともおまのまやう万ハりひくまの遠ののま跡で

やど所の腹のまき遠回の姑末との震返しの米次第を千ト
困らして吾侪が腹を匿やうと申しつゝお情の中を
吾侪が方人トりて喧嘩は論ホの技のこのよひたふさひ
その慈向の形どやトひつらう儂まの耳の口万ナナ何と陸
分おひらりらうき所と一番甘くやうてギタうとわして見交
何れに望むお七異なるさうトその謀校を遠くの圓を今
さう吾侪もいざいざ大助のやくと兵びて今やうやう宣ひ取
向とて圓らしとまの跡で米次第さるが丸積の通りふ

陳機意をサのゆくお茶茶おるその候をみりうらうらう
今うら船と飛してト頼て兩個のこを立出或船宿めてを
根船と仕立させたま移り大川きうと漕かす

まの謀校はいろいろあるや。その産中も別人あり。殊に
密々働一のまじぶあるもの終てな。后々の圓あて積み
解する着信ををつけて渡らんるを預かのみ
ある三浦の清鶴ハ米次第が方み持々の混雑のりとも
おらねばい程終て音信の事とを裡に不審り

が。世の人の心のたゞ。まの盛と見。枝のけり
常。散る。福。三。年。の。列。條
の。身。の。行。ま。と。清。い。中。も。ら。秋。風。の。と。ま。ま。
の。め。や。と。も。の。ま。い。ま。の。目。毎。毎。の。物。思。ひ。殊。々。
香。の。も。今。傳。ふ。り。身。の。め。ら。る。へ。言。客。も。新。の。出。ま。其。だ。
備。米。湯。希。ふ。捨。る。ま。そ。再。度。の。勢。を。さ。る。身。と。ま。ら。ぶ。い。う。み
悔。し。く。初。め。と。先。の。先。ま。を。種。の。思。ひ。こ。が。ツイ。癩。の。種。と
ま。る。る。女。子。の。情。の。回。入。目。の。公。地。も。悪。と。そ。都。屋。の。の。引

籠。て。髪。を。も。ろ。り。の。げ。も。替。へ。と。ま。り。夕。暮。れ。初。今。の。客。の
ま。ら。り。と。園。を。着。者。を。思。ひ。出。し。け。は。い。ま。ら。ら。ち。の。う。思。ひ。
通。り。痛。む。で。引。込。め。居。る。の。み。ら。せ。初。の。客。を。み。ゆ。ま。の。ご。ま。寄
て。一。も。危。ゆ。も。左。指。り。つ。て。解。で。只。る。ま。一。身。一。身。初。て。ま。の。ま。の
か。な。な。思。ひ。を。も。と。ま。ら。し。て。再。度。ま。を。解。ま。し。け。し。と。その
客。人。が。何。だ。も。お。茶。坊。を。あ。け。る。ま。ら。わ。ん。ま。の。自。ら。身。を。ま。ま。
も。宜。し。と。思。ひ。を。知。し。て。居。る。う。が。を。解。の。り。の。ま。を。接。は。れ
く。是。非。と。を。作。ら。れ。さ。う。か。夫。で。茶。坊。で。も。折。角。ア。は。作。り。の。

ひびきて紙の裏を白根と黄金交り紙を密と様と
別々いわうと云ふ小遣のゆげやせうとせむが筆末の
と云ふはあみぐさうざらむとあり初の客を不仕極る物と云ふ
中らやあやうざらむと云ふか若松の方へ頼めと云ふ
客はあやうざらむの通り田舎客で此當地の客といふ
客は老ても客の客と云ふ初下も僅な小づの客のことと云ふ
ゆゑはまの星と雲うらやと病をて居るも然とせむが
厘下りの客は左様男のうらやと病をて居るも然とせむが

左様いふ紙の裏を白根と黄金交り紙を密と様と
一番き紙の裏を白根と黄金交り紙を密と様と
客はあやうざらむの通り田舎客で此當地の客といふ
客は老ても客の客と云ふ初下も僅な小づの客のことと云ふ
ゆゑはまの星と雲うらやと病をて居るも然とせむが
厘下りの客は左様男のうらやと病をて居るも然とせむが

福見茶の生次第。とぞうごすのさう。當りこらうトて清
 精あひみやう。ひちど終て音信なきを。何れしこのを安まらふ。
 先づは方のをを幾ひ公のみふら。客を裁せしめぬ公
 づき多ふ形と改りて。はらばせんのるを。何れしとわめて
 居るぬまま。客へさしや。あらわ入で何れまらぬ。全体お
 参を見せしめこのへら。三月花の時分その時直ふ上りまら
 ぶがヤ待らう。思案場所先ハ全盛の立派な娼妓此方の
 那の殿くまを。爺父。さうと面白く入。柱もさぬ。あうしやう。

ま出せが身法をまるといふ方もある。あう娼妓売ハまらふ。
 好男子を所持のいわく大金をかして身法七まのり。
 逃ても往見せ見ると老來の癖ふ彼極へと笑ひ見るとも
 悔しうらう。よく内証と安れ七とまら。終て骨を折てゆふ。
 あう好男子白河根町へも人まら。七客をせまら。福見茶公
 近く娼妓があるもの。さう。身法。お茶の方ハ。許さぬもの。
 らうとまら。うらうが公の樂。さう。世間ハ。男もの。を公。
 美しの娼妓の物。さう。まら。振る。て。他の女房持人もあり。

宜まをしと孫子の爺もをどわひぬた爺いもりの...
浮世わとりのいづら。烟草くのをその顔の屏風のうらゐの
思く寝と見えなごの人のりあが直さ言のりもぶかひせんと
胸のうち。燃る火種小頼ふこ。顔の紅葉もひら時雨睡の
うらゐを密に試て。は「こま久〜」別段でまき〜うらゐづら
ませんけきど左様と云を彼方の無汲る人〜女房の成り
の位のとゆゑあつのりません。候令男のうらゐ及ぶぬ意とやんご
のりまぬくら客へ〜瘦我勝せんぞら左様でものりまぬら

「正実がぬまき」客へ〜と直しの遠ひがら〜直小お爺の
男清と連で社がサぞうご。は「本三左様れば嬢〜が唄〜
なかりおやせませんト了得妓女の果敢るま。他のこまあぬ
情〜。程成合まが方の効り多〜つ〜まおもりのこと。すま
小唄の淫ひ〜も。その実情を浮らうとの〜。情の怨小連の
客。あまうけら〜障子とわけ。おらとも入ら見令と「魂胆
辰中か〜うま今小使の社〜うらゐる候お見世トゆゑあぬそ
は方の客〜太助さんま。お遠入。魂胆とゆゑ理〜らゐのら。



相談も大方極々々 太助 下りるやど寝る今寸主屋を志す初巻
 多為法たゝゝの相談まがたんイヤ好男このの遠とほのよトのひつ屋園やうゐん行
 わけ七しちはひひののは提さげうるある幻燈えんとうと法ほふ轉まが侍さむらひのおきおき太たへへくくか部
 暗くらくらくらやアやア働はたらか見みえね人ひと 太たへへかか否いなささひひ松まつのの明あき〜
 ちやアちやア太たへへ働はたら〜も頼たのが見みえね人ひとと乃まの悪あくいいんん〜
 万右まんのうぢのさぬさぬままるるふふののよよ〜のの妓こと根ね引ひと交まじりてあはれ
 面おもて目め次第しだいもさのさの縁ゆかりで働はたらきあつたあつ根ね丁てい一いつ連れんでで行なるる〜
 ののくくららままるる吾われ俗ぼくがが为ため清きよ〜と對たい談だん〜
 今いまののゆゆ〜人ひと

眞まことぢか情なさけ〜やきやき 太たへへままぐぐ〜ままででめめ〜
 内うちでで茶ちや屋やの女おんな房ぶどうと母ははよよせせてて聖せい母ははのの掛か合あひをを見み〜
 多た年ねん季せきもも僅わずかななりりまま〜當あた人ひとのの生なま世よもも多た〜
 多た分ぶん〜成なりととけけハハ勤とほま母ははいい〜典てん身しん涉せつ〜
 兩りやう分ぶん〜ををおおまませせううととちちきき〜
 料りやう費ひ〜をを賄まりりてて呉くれややうう〜
 早はや〜其その慈あまささふふ相あひま談だん〜
 やや〜招まねくく〜邪よこしま魔まのの遠とほ入いれ〜
 法ほふ轉ま〜さんさんたた〜
 清きよ難がた費ひ〜をを百ひゃく

ま ても。 ずねんつめ
まんがお茶がよ堅くても 数年勢とまろうちめ、 ねま
まげづくも 悪豆とやうものりうる。 物とくわねて 固及んご
ライシとよ 堅く 斤を 付まぶ 世間を ねん へ 旦那 どの 方か
両方ぞ ぶらい ませう ト 等々 今ま 流く 法 勢 今ふ 任ま ね
身とく 又 米 汝 希と 六 縁て 一言 約 束の あり 中を 彼 方
かか 憂り 一 只 今人 傳ふ 國の 一 言 証 拠も あり ぬ
他 一 希ふ 身 法 せ 花と あり ぶ ぶ 実の 実の 実
ま 且ん 去と 公の 事 人の 心 中と して 身 出 金とも あり

ま 身 清の 相 法を あり も 外ま 春の あり ち 年 春の 明け
うらとも 身 小 胸の あり 借 金 小 浮 心 頼 する 身 とも あり ぬ
永くこの 身を 川 竹 小 沈 むる の ま 年 老る 親 小 ち の 安 堵
ま 倉 だ 備 め の あり の あり ち 倉 小 せ と 子 小
碎くる 胸の うち 途 方 小 暮 暮る ち り あり 一 が 流 くる 心 小 居 ぞ
人の 形 方と 流 星の 水 の あり ち 世 の あり ち ち 人の
親 小 ち せ 一 回 身 法 せ 且 ち 後 ま 途 方 小 あり づ ち 思 入 り
うら 勿 死 小 花 小 菊 小 等 ち 膝 ま ち 上 居 減 小 衰 の 極 ち

齊くは所は類々入用万の万右の右の類ひ
 下不自由さく。送るふつけ七はひのさ。一はひのさ。一はひのさ。一はひのさ。
 思ひふけさで朱法帝への通路へ堅く禁めらるる公
 さるばる今日と暮し。明日と明日と居るけり。

末摘花四編上之巻了

閑情末摘花第四編卷之中

東都 松亭金水編次

第六一回

嬉しきりの吟へぬ地獄て佛とりぬりぬる現ぬれりの
先後めて二個の地獄の客とももるべき所を皇天の
おん汁をひり神佛の清らぬる清を助へるは末次家
行遭て今般墮も同もぬるを世ハお里母子のもの
怪しむらむそ死を止まらぬ偶ふおらぬか里が家直目も

あき身の過ぬ消も入まき公地とてき世の火氣ふ
身と及びまき清く動の首を低て何と言知及言棄ま
あつふ初うしく且哀しくて人知はば溢き涙を大指の
腹み拭ひも敢ざる風情お里母子ハ米次希をき世が
兄と笑うふ不測の縁み胆決してし忙然とるま
あつ米次希ハ形を改めお里母子のもののみ射ひ米
種く混雜で何う言て宣らうア胸がとんちやんま
まが礼う先へいそよ今途く清きん小妻しく聞こ

お茶方お兩個の信切で命と佐うこのまきと。今日
までお世活みあるとのよ是も何のう因縁ごらうが。いそ
き世が今の親まが兩個がきりて居る顔を見て安堵ハ
あつ不鮮あつ見詰と所が有福でもまお茶方永月
日の食客のまきと迷惑でるこらうき世もき世と各各の方へ
内福で言て誠しく。何程う仕やうもまきとめら左極ハ
おとまき吾侪が方でお茶母まきと清きんの両親まらも七と
投て何でも死んまきと遠のまきと實不智と目と命目と茶湯

日向とあるのなかりサ。斯く見まはる無くしが親同
胞のまじり別段で人の茶を不埒も憐れ奴が死でも買とる
強く言ひて居るもの。漢どくさ。此物の瘡彼がもる具全
他を見ろふつけても最母が悪病も歎きも主理だわなぐ板
固の世間ごと実のぼる目ハ一月もあつてヨト働すはあつ
清くぬき世無の物つら思ひまらせが身の涙の泣くもま
悲しくしてこそ思ひの憂もそ。泣伏ももるほどなり。お里親も
泣母のおみまの膝まう寄せて。お三のものには方でも目も中

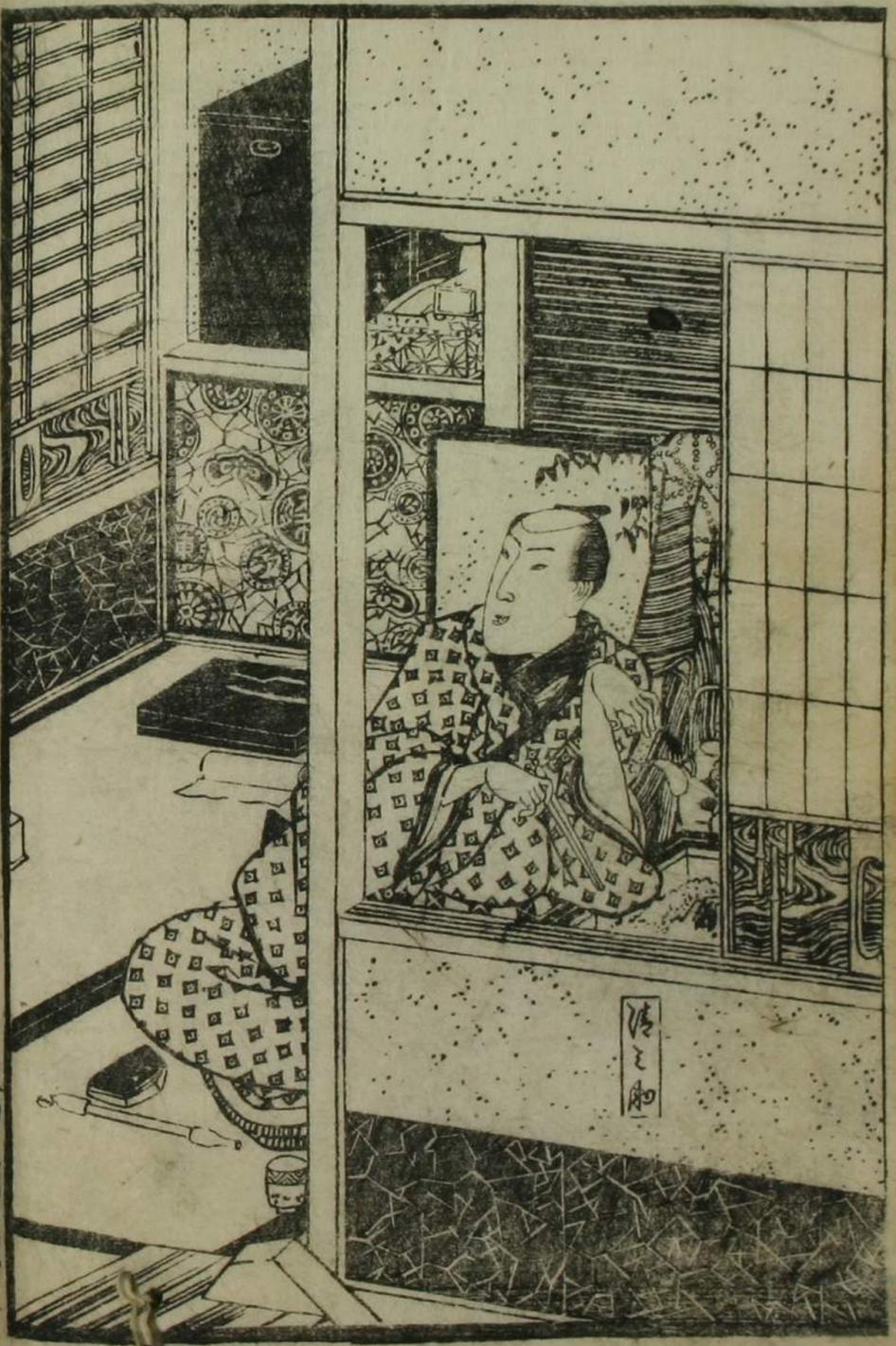
暮一ましてま。清さんおもを世さんおも。數回やま。しげれを候令
飢渴て死びと言てもぞうと親同胞へ。泣はをたまはるものことな
作て変と宅をお明。まき。お思ひて見まはる。お三もあつら
達てと妻もい。う。ま。せん。ご。困。ひ。つ。切。り。暮。で。お。の。者。え
やうくと食や食もの瘦身上まう。か。両。個。の。こ。も。あ。ら。い。板
鬼門でも存まはる。お三。お。初。の。ま。ぬ。る。呉。服。や。髪。の。上。の。お。三。目。を
一。品。づ。も。代。り。て。その。目。の。米。の。代。小。米。の。ゆ。も。あ。ら。る。の。で。お。三
左。板。の。ま。ま。も。の。こ。も。を。持。て。り。詮。方。は。な。り。傾。く。今。で。は。お。三

通り見ても苦いアアか形仕振様振もつ果ておるふ死ね
才張と世ともちた例の活業入出ま〜田守めはま
重三郎か命張いサを世さんお兄さんお兄換授るさい
おまのまのまのまの世間を老くわらうものおまの
詮方もろ。是ら先の字張が肝をどきいま〜一書
曉たてを世のやう〜進のて任言入も口のら果次第
妹が形の昔あう。面影のま胸はまてかぬもの紙
より金箱の底を〜一両分の懐紙の拾うて半一折

い支もあわぬら。今教ハ持合が少ぬ人がも多
金と頂也。左様を〜アお頼りやて
身勝もむらせ考ねて些〜同胞の苦勞も想像
其考あう〜七居所もあま〜自己がゆり〜
等ら。左様を〜居るせトりて
金と頂也。左様を〜アお頼りやて
いひさし〜。彼方もお寒く〜酒でも〜

まは八聖のりや全体今夜出うけのふおあ方の折入て相
待一とんかがるそや 早左様でございませぬ立込願ひ
毒る種は信如の存作て下さのまうも安入もさぞお獲
まであらうらと常住おぼせとて居ませぬ 所が今更
非ともみ園を暮るぬもア園のこけサト見下り桐生の方存ひが
おは滋が家出のりや世に桐生に結号のあらうの支み付て
精々おぼろしく極るく之は桐生叔の太助を特にお里も
合あるやうふいおぼろしくみまを奉りく働一下のり條

おので除りも茶店のやうどけきど左様も言ひや遺限が
付ねらう杜撰の言出はと叙も願ひねらう者ごうら支るも
女児を自色に養女とて迎もの幸ふ婿れをさせ居らふ
とまでお分園させるらうらもねらう下 お里さん実の迷惑
ごらうが今の次で園もくおあす及小吾侪の情合もあつてその
太助といふ人の怪ごと言を居て呉ねらう勿論叙も養女にする
らうあやア父子の盛でも仕振といふごらう一も婿れませ
後けはるらね人といふ目あると衣類ハ勿論髪のはら



男の工美かきく早凍ふお返拜とて彼方中も安堵させやが
り。 宜あつ一誠の課典人並の誓れでも。 左振中つとまればたのぞ
き所ハいろちもあつの毒どが 左振中つと減の宜がまへが
何でもい換の一ツや 草の一筋も持て居るバお氣にまらぬ
仕宜けきどいおのりあつの怪を 左振中つと衣の
十もどお世持ふあつのが 左振中つとおの毒どふあつ一筋と
左世さんハ姉妹のやうにおを易くする。 そのお兄さんの所
ら幸け方で頼つても。 仕宜るのりも 嬉しけきど一りいさして思

母の顔母も偶々仕息を功ものどつとをの故びのらなと怒り
つと米次第ハ見てきた 米ハヤサ今もの通つその一件を案
あまんどうせ好と女房と持のふ美顔もの持事ものつとま
ん 根も其の只唐のやわらう。 せんもお振方のその次を美和と
ん 異あまのり玉 ぬきハく電小左振中つとまればおどもの大傲作
左世さんハ清きまの 後のお氣をとお交のしす。 左振中つと
見るとは縁とのふのハ不測もあつたかまへん。 利三左振中つと
おまのハ何振の嬉しうどおまへん。 全体傾る。 左振中つと居

きつぱち里まへに松ぞもと遠ひて標致いり一むらう。親孝
多きまこ
初を減らひひんはるうらうぞとせえの新婚のをも成さる宣
らうとけりも不意と思ひよりいふまがあらうとてわらざるま
うま あつた せんせねどもい干隔湯漢まで思ぐともぬれぬうのめ
わへのちまゝの身の上まで左様でもあつたうと後母もお里まへ
今と昔の樂る暮一松ぞの傾く嬌いト莞尔笑ふ面影い
現や地獄の深人が地お井の湯杖ふとう携りうる熱さあつた
見るもあつた痛く米次第へその身のせまね頓の極みの

るが日未按ぢ一妹と情も助が死のうらみのうらふ安堵の思ひを
做してそのお別れを清りうが翌日あつたけしむ金子を携へて
あふまりのお里母子と娘と一室世清も助もとまじく一時の
哀願を潤く共々且その住居の見苦しくして太助が思ひくも
まま あつた せねどもい干隔湯漢まで思ぐともぬれぬうのめ
困る位り一する明察のありけしむ直ふまを借けりて
淡路町より引らるう一竈と始め世帯の及具置戸障子
湯釜まで家相なる物紋潤く二階と兩個が仮住居

まのふ小ぢう。今日の目入とまごど奈はるる。黄乃吉日。お里母
まが同来より。笑しき中での仁公。功德深し。来りて。庶報輪
回。善いも悪いもゆりともあるべし。

作者曰。是より米次帯へ太助を伴ひて。よま来り。お里
母。小対面さして。お色とる。且お里を太助が。家へおび
お三万をらと。招きて。養女の盃をさ。せ夫より。結納の
次。お替れの日。おひき。ひりゆ。つと。おひき。おひき。おひき。
くさく。あくと。理の。お煩。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。

の法。君。直。と。ま。あ。と。七。漢。ゆ。お。ん。と。を。お。ひ。

第廿二回

白羽根町の福見。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。
魚市へ人と。ま。下。を。料理。の。献。立。の。ひ。ひ。座。番。の。帯。掃。除。床
の。掃。ろ。ふ。蓬。葉。の。ま。お。古。例。の。蝶。花。形。千。年。の。松。の。世。の
竹。ゆ。で。と。そ。の。男。ま。う。く。ま。と。その。夕。暮。お。る。り。う。ぶ。米
次。帯。の。衣服。と。お。へ。ま。が。聲。入。の。仕。人。と。と。青。漢。と。丁。将。を
つ。こ。箱。挑。灯。を。と。準備。の。持。せて。太。助。が。方。へ。と。出。て。往。く。

程もゆきぬ見暮て圓ふ小灯を燭臺に出途への桃
灯と廊の鼻ふきへ懸りて。米次布が撃入より帰るを
相尋不途仲まを迷ひぬ出人と見世の侍於あるひくお音
出入の人々待りまて居る所へ向より来る三四人ごとくと
見世先へ這入るを見まぶ見まぬ人跡ふりし一人の
女ハ年まご二十四あるが。その風儀ハ娘女もまご今宵の
新婦とハ男もまご殊ハ米次布もまご帰らねハ娘ハの
末へまやうと人々不審不用と目と見命を次りのも

多りし。先ハ挑灯持る男見世の場人腰さうけと
ちやま。後輩の者むき人。やまが。且那の内室さんハ情まね
やして。あまを送門でまうやして。ハイ橋ハあまうーやせと
言捨をまを。侍於が返せ。伴ハハイのまごいハあまのまご
内室さんハまごまごいハせんが。モシ門遠ひしやまごいハせん
る。男ハ門遠ひしやまごいハせん。福見屋とハあま。白
羽根町ハ一軒。あまのまごいハせん。伴ハあまのまごいハせん。福見屋ハ
あまのまごいハせん。ハテナ夫ハあま。今夜ハあまのまごいハせん。お娘ハあまの

此妓が送附せんとて言なせり。とて侍を遣はれ奉りて
 此方へお上りなす。いと小棲より形もいと可愛
 なる。優女見世のついでにその跡もなす。一人の男
 年寄四十あるが。その見俗の舞の踊り。結城小紋の
 見せぬ。また若衆も。古布よみ。結城本物の吉新
 ちき。羽織と。あつらひ。傍物と。いりて。あつらひ。行末も。合はせ。

その切はた。橋の法も。とつと。伴の顔も。あつらひ。おハ
 凌草待乳山のき。お住居の辰。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 人の當家の旦那。末次常き。と。年寄のお別。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 まを勉と。いりて。身も。自由。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 引き。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 且。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 且。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ
 且。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ

方が左振りのへり。ちよとちよと角も角も全体は松の約束と
 だ。その女の逢て聞て見交す。まよ米決布も降るご換こんで来
 やうとの女の居のを隠して重て他の女とわうくと女房の仕
 振と云がの。夫も自己一ふで海もの。今夜の娘ハ仮初参り
 らる万右のうが巻の女先ぬ親も叔もの。吾等自由ゆ
 るねと云はづく。夫と重くあつて居るが。サテ持もね下腐
 怒り。寄ても付ぬ威勢さる。母親ハまろこを看ぬと見
 法でも解こ。モ娘が降りてハ太助の長人も候と見世
 ちよとちよとまよと云答ふとゆが先のぞく米決布とのりハ約束
 ともゆめ来との口後のも他ハ仔細ハあつて見の事と何ハ仕
 ても折悪けまよ今宵ハか一取舞もあつ。妹ハ米決布も苗子の
 と。帰りの上で鳥くと相後しては方より云の油汗をまやう
 程ハ今宵ハ帰してゆき。と。又ど彼方ハ得合せば送る来
 たる二人の男が帰るハ固束賞然女ハ當家の娘なれば一旦
 櫛と誇ごうと云。そのまよ帰る程ハ一と救ハ方起り今宵の
 容よと附込をりあつと。おとハ腹もさうと川のせせと散も

ちよとちよとまよと云答ふとゆが先のぞく米決布とのりハ約束
 ともゆめ来との口後のも他ハ仔細ハあつて見の事と何ハ仕
 ても折悪けまよ今宵ハか一取舞もあつ。妹ハ米決布も苗子の
 と。帰りの上で鳥くと相後しては方より云の油汗をまやう
 程ハ今宵ハ帰してゆき。と。又ど彼方ハ得合せば送る来
 たる二人の男が帰るハ固束賞然女ハ當家の娘なれば一旦
 櫛と誇ごうと云。そのまよ帰る程ハ一と救ハ方起り今宵の
 容よと附込をりあつと。おとハ腹もさうと川のせせと散も



母親ははのいふことも数多のいふことも猶彼等とくさらひ時刻を
伸びさるの内の真の新婦の来るべし然して見まはる人知らぬ
袖を吾ら見らる所にまが今宵の角も角も満ちて返るこ
小如ハなとを静か胸とますらるていづれも後の要を
やうあせぬやど今宵の肝の主も當りまらく帰りて相
逢ふ聖ののゆでもあと下さすこのいども可ぬ佛頂面三夫
でお茶さんの方ハ宜まうもどまうませうが松方の密書一下
まど迷然りうまらるを縁とくやせども團圓の中への女と

美さきまたまはる胡夕の新費も多く當家の且那もか特と
中でとらけは松方の預けも同様で扱を死でまりませぬ
まが角も角もの婦人のまとあとで帰らませう下りの尾分を
一人の漢ようでせくゆと幾度言ひてもおんりどかくあり
まをうたと汗痕が何と言ひまらても他の女房を俗時まも預
ろとま助人ねとまわるまの所へ回らねてや万右らがあるまらず
かまり人の想を見こととカハカお松方ハ何らの女が米次家の
別保で女房約束があるら連てまさこのいのまゆく女中

かたろふ^い公^い所^いの^い何^いと^いり^いの^いで^い公^い後^いの^いや^いり^い七^い米^い次^い布^いと^いそ^いん^いを
幼^い束^いと^いあ^いら^いう^い言^いを^い穿^いせ^いる^いせ^い下^い回^いひ^いま^いを^い今^いま^いを^い何^いの^い他^いの
任^い七^い一^い言^いも^い出^いる^いを^い下^い山^いや^いう^いく^いと^い類^いを^いお^いけ^い女^いお^い孤^い一^い
身^いら^い初^いハ^い雅^いま^いの^い第^いら^い邪^いの^い効^いも^い名^い六^い清^い體^いと^いヤ^いマ^いが^いお^いの
且^い那^いと^い深^いの^い幼^い束^い見^い非^い市^いの^い女^い房^い中^いの^いう^いに^い甚^い更^いの^い樂^いも^い
長^いい^い身^い更^いに^い侍^いう^いち^いふ^いが^いう^いく^い仕^い候^いハ^い一^い向^い見^いも^いま^いを^いう^いり^い息
災^いで^い居^いる^いう^いと^い一^い言^いの^いの^い音^い信^いも^いう^いの^いも^い同^いく^いや^いう^い思^いく^い
る^い瓶^いの^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い邪^い魔^いの^いあ^いら^いう^い言^いは^いら^いん

是^い限^いで^い汝^いも^いこ^いう^いハ^い夫^いの^い身^い修^いめ^いる^いは^い儂^い俤^いも^いこ^いう^い
居^いる^いの^いハ^い吾^い情^いの^い後^い身^い連^いつ^いて^いあ^いら^いう^いく^い一^い言^いも^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い
何^い男^いの^いけ^いん^い言^いを^いま^いせ^い細^いう^いが^い一^い言^いも^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い
て^い來^いる^いハ^い當^い然^い々^いの^いも^いう^いく^いわ^いく^いな^いら^いう^いく^い一^い言^いも^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い
今^い居^いる^い宅^いの^いか^いら^いの^い身^いは^い書^いか^いて^いあ^いら^いう^いく^い一^い言^いも^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い
其^いの^いけ^いの^い男^いが^い進^いむ^いも^い男^いハ^い五^い當^い時^い私^い方^いは^いう^いに^い進^いむ^い所^いは^い
淺^い草^い待^い乳^い山^い賣^いト^い後^い世^いの^い茶^い海^い尤^い就^いト^いか^い尋^いむ^いや^いら^いれ^いは^い
幼^いは^い身^いを^い不^い残^い不^い残^い私^いが^い吞^い込^いむ^いも^いう^いく^いわ^いく^いな^いら^いう^いく^い一^い言^いも^い出^いる^いも^いう^いや^いう^いと^い思^いて^い

振と連てまをみ所を赤をと國とまうこ田のうがもろく親
 身の思情をまをこまをこ思ひまをまをよの思ひ親の思ひ
 袖の叙の和と涙のうまを新用まををうけははし
 何を波風さく納りまをを仕るまをまをまをまをまをまを
 左振其くも社りアトまの洞之畢るぬみ桃灯二張先の立仲を
 糸しき行箒の端の六太助が黒山袖麻の上下製まこの麩
 先へ来るひり

末摘花四編卷之中了



閑情末摘花第四編卷之下

東都

松亭金

第廿三回

再脱太助の衣物の戸をもち披きそ徐くと内より雪の花娘が
まきもよかけ つらゆき
 その粧ひ及風俗の花小柳ふとまきまきを被る雪の綿帽を
よきまき とちやぢく まきまき
 後襟とる仇先へまきまき末摘花の三月の貸入の打
とつま つまはした
 拵ある美女の姿とてそそり入るまきまき体身と傍
まきまき
 納戸へ入るそ太助のまきまき母と万右衛門へ今宵の祝儀手紙
えいど



ごうりませんトのへ切ハ他でもまのミ米次第の所房が這様
のふ不埒千の吾もたを罪と切て明の口が塞が色やせんト
清勝が一伍一什を粗をましては身を吻き 万一そ所では大
きん 却う中まも 松不故て 面用 次第もごごいぬが 男のも奇
らぬ今の所合どうせ端で 彼色と 同着があらぬかして他の
大切る 女児と 若の 刺へ 吾が 養女不七 級と 祖や 吾女公人が
始まつて 見まが お茶へ 對し 親家へ
以茶う米次第とお里どのの 情合

のりけとで ちやア五の 秘づくで 吾あハ 何所 何れも 知ぬ
シテ 見まが 今回の 一件と 知るまが 婚れまが 人の 女児の
癖をつけ 癖の ぬふす 同茶 養女も 和も 知ぬ 又 男ハ 養の
面水 性やう ちやアくく 居るを 知らうが 吾ハ 偏屋
ので 木ハ 木竹ハ 竹と ちやア 人の 癖は 人間 物ハ 養女ハ
さ母ら 養女ハ 夫ら 夫ら 夫の 養女ハ 夫ら 夫ら 夫ら
跡で 彼等が 相對づくで 引まう 込まも どうまも どのまも
勝ふぬ まるが 官が 松不 養女ハ 不業 養女ハ 養女ハ 養女ハ

左板おもしろいものよト苦切なる顔をあけぐ縁めて太
助ハ深き太一平万ちらまん本もへへのおふりて美知の
不業かぶのと持もねく身もわど女が根込ごうと流小崎
あがわらうとの以計終の事たてもねが夫と女お茶の
身道はなろうねどもが迷惑めやア空も棲ひるまうね入
のうコレサ後ろくことお穿るせ人お里ハ松が怪ごけきごお茶の
養女おきつごうのやア。是くも花ハお茶のよ。お茶
次希どのふとも不念ものう不待ものことお里お茶の

のりて疵のふさうしものご万玉瑕物ハるあが疵の
贅れさませごう人で着彼尾がのりて見ま。お茶ハ七返する
るはさまごうと疵物おひりねくお茶の破法ふし。お茶
でも疵がつくとさへ孟ハあてもあねくでも。納末お受てを
お祈へ出ても天下晴てのま祈おねくサアま祈ごうを
ごうのふ。おハハ大夫丈夫な。お茶。お茶のわい通ごう夫
るは改めて今晚又今懸縁おあませう。太一左板のまご
涙もまごかお里の身分ハお祈し七下まらる。太一お茶お茶



宣嘩のやうなるもので見ると一箇が固くまほしく、
 氣を直して和らう。お鬱せつけとお異なすナ。松も縁が
 のつて是まよひのうらや。人果に片きんうに振るゝとさ
 らうとも、それ交ぬ者、ちうと怪もまのません。まらううのうらと何で
 居ようごさるまは、まはく左振のうらやせぬ全体米次第が
 身持の愛の祈り、まはて破法なる程ごうら。ゆきも松共が
 森想と窓初ら、まはててくは太助のうらその弱身へ附込る。
まらう女の内うらお里が身分を引受方のゆのこり、まはては麻住は港と

およの太イヤサが麻住ごサアその麻住のこりけを固ラト赤ら
 ちて叫らんとき。この時毎に万をらと太助が同へ割て入
 こはサテ、まはて強々い言らしやア。このまへんへ、まはて神小
 兵成ま。まらむご万の米次第が悪いら。七お茶の論判
 先刻の圓を、まはて居ても。まてお切かして、まはておのまの母の申
 何振の評のつま。まらむら、まはておのま。おのまと存トセ
 居らこのお左振各々。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。
 おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。
 おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。おのま、まはておのま。

若いののいひさういひ得遠ひものうらちと許さく親の移り
大まのゆかりこの家の主とわいへん人でも七人でも家隸眷屬も
つひまらぬ妓婦もごごい女児もとまぬつり女舟のふま
放蕩早竟とまゆ今宵のやうふ不意の發見が押かす
目公度といつて出入の完まを尊てあつてこのわい昔の人
の言ひ通りををわと思つたわい一まふわいこやう公の裡だ
いと男のう先刻つこの強きふくくもすたもなまなま
降りの面目もふま言て居るでもらうけいもい見せん

一助もさういとい他へ思ひまを夫で指し他さぬの贈りも指さ
居る他へ老ものまこの母をまらうて憎くてもらぬ世が不埒
とまゆいあふ肩身の縮ひをまらう方までよこし梅のう麻見
妹実ふも想がつま果て果てこいひが結ぶまらうのま指す不埒
存りのあふの身上六預けくらまねサア劫當とまらぬわいあはれ
有り勝ふふ出てゆけいもいもいもいもいもいもいもいもいも
婿のう婿とまり娘とまりも世のうの深の因縁今うら吾存が
女児も七実存るものを見え婿をあらうこの家をばいしやう

左様と云ふ桐生の兄さんかたがらが一旦養女おんやしよの仕しままのの振ぶり
身みもも太た助すけさんがおお田たのの舞まへへ言い訳わけももありありませせううト母ははが
言葉ことばの理りの當あた然ぜん万ま石いしのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
こぶこぶのの米こめ次つぎ希まれハハ万ま石いしのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
牛うし一ひと枝えだのの清きよ鶴つるががありあり一ひと次つぎのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
その上そのうへ彼かれとと未いま始はじめ終おしまのの約やく束たばああるるりりももわわららぶぶ事ことのの明あきねねどどおお振ぶり
ううとと身み修しゆめめるるてて僥あや倖まいいりりのの事こととと合あ意いゆゆべべのの事こと
角かく中ちゆうもも折あ悪あくくくてて三さん方ぱう四し方ぱうのの身みにに清きよ不ふ動どう當たうのの身みとといいふふことことでで

今いまささらら懐なつかししとと詮せん方ぱう一ひと人にんををききけけるるちちのの人にんもも他ほか出で入いりり
今いまもも口くちををききくくてて母ははとと娘むすめもも万ま石いしのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
岩いのの任にんををききくくてて母ははとと娘むすめもも万ま石いしのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
けけこことと詮せん方ぱう一ひと人にんがが厚あいいむむままここ一ひと人にん密ひそかかとと言いふふ事ことをを言いふふ
ままがが今いまもも口くちををききくくてて母ははとと娘むすめもも万ま石いしのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
ととをを調しらべべるる一ひと人にんのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
味あじ方ぱうのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ
ととうう落おちち下くだるる候まうををききくくてて母ははのの言いひひははとといいふふ乃なをを思おもつつてて飲のみみ

がさういふまでもなく、^{おん}年寄中が、^{おん}おのちの^{おん}おんおんおんおんおん
の記号のその女中が、折悪く、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおん
縛りて米次常さるの、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
中こそ。おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
身におりまて、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
継ぎませう。おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
やうく候なまの、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
とるやういませぬ。^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

米次常との縁組、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
するのぶら、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
ておんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
持て、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
かて、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
入るおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
何と、^{おん}おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

第廿四回

米次糸の場にも。幼當の身ともうし。きつて行く方も

なく。まづ他の産人のうら。か里が母と妹と。清く助はけうと。

委女く。清く。人々の。向の。足目。又。あのおく。目。目。目。

見合を。むらう。か。候し。練の。まり。の。佛の。野。う。あ。ね。だ。も。年。未。

貝頂の。え。ん。も。ま。え。を。あ。じ。ん。と。も。ま。の。間。も。あ。い。な。の。

大。愛。美。で。お。の。ろ。る。ま。る。ふ。ん。を。あ。き。あ。ま。と。あ。し。の。當。下。の。里。

母の。お。み。ま。の。米。次。糸。が。ま。ま。を。う。ま。い。く。ま。ま。の。小。宮。を。し。り。

仲。より。を。ゆ。と。文。一。通。ら。る。の。り。げ。た。め。ん。ご。う。の。お。み。ま。と。し。り。

見。終。り。か。し。子。も。不。測。ま。と。の。ま。は。ま。と。の。あ。い。の。今。の。

お。菊。し。七。始。り。て。あ。つ。の。娘。の。の。の。清。鶴。の。を。作。の。三。浦。を。

て。い。づ。の。ま。ま。を。ん。り。と。同。じ。に。て。け。方。も。不。愛。類。お。み。ま。を。顔。を。

うち。縁。り。て。米。ハ。イ。三。浦。の。あ。屋。の。清。鶴。サ。勿。論。と。し。り。の。あ。

ら。お。り。の。あ。い。の。ま。ま。を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

母の。糸。と。を。言。傍。の。が。し。り。の。あ。い。の。ま。ま。を。の。の。の。の。の。の。の。の。

一旦。末。の。終。業。ま。ま。の。仕。と。ま。ま。を。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

の。一。心。卒。の。明。の。の。の。二。月。ご。と。縁。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

渡りし まるく。受け。すま
渡りしすまの受て。捨て。しんじう。も一圓。のり。恨。を晴。し
あり。し。も。り。但。し。黄。金。不。見。と。そ。の。悪。巧。も。り。圓。は。足。不。老
ゆる。角。の。り。の。公。根。を。捨。て。後。不。御。も。の。り。と。ま。ま。し。う。を
せ。世。と。捨。と。秘。と。密。不。ま。ね。さ。を。か。く。と。の。御。汁。を。吞。込。せ。法。術。が
え。ん。文。面。不。家。の。主。の。元。終。と。を。昼。夜。も。地。内。へ。も。賣。下。後。世。の
宅。の。居。も。女。房。の。針。線。の。下。へ。通。る。お。り。付。て。目。暮。ね。に
歸。り。て。夜。夜。日。中。の。一。人。で。居。る。ゆ。え。の。時。刻。を。な。ら。し。め。て
お。も。し。目。中。の。の。り。も。望。目。中。の。の。り。も。計。ら。る。へ。と。ま。ま。か

其。後。八。休。の。り。明。日。の。り。け。し。ま。世。世。清。い。御。の。准。後。と。ま。ま
ゆ。り。の。ゆ。り。米。次。希。の。頃。巾。眉。源。山。さ。し。て。多。計。り。
か。つ。も。お。り。法。術。の。思。ひ。あ。る。身。の。ゆ。り。た。た。案。が。さ。り。り
女子。の。常。夫。婦。の。傾。不。出。と。し。ひ。て。と。独。火。鉢。の。ゆ。り。の。計。り
と。そ。の。折。り。の。表。の。方。の。女。の。お。り。ハ。イ。の。免。ま。の。さ。し。ト。ま
て。ま。ま。法。術。が。隣。子。の。透。り。さ。し。現。き。ハ。お。方。う。り。お。ゆ。り
ま。ま。ハ。イ。折。り。ア。法。術。ま。ん。お。目。の。り。と。ま。ま。と。ま
ま。今。日。の。お。朝。を。ご。ま。の。ま。ま。ア。イ。の。目。の。り。お。お



お茶が
あつた
とせ

もうあつたが出来ぬと。他はほまるも残念ごと昔性貨の
一族とやうで兄さんハその時より奥の勘當さますゝめ
兄さんの言葉は只法師さんと物案と七七並みぐら。おは
母は他の女と恥ひ苦みの義理の海をひるこけごと。今更の
ひるべきもののつとみのつとみ。詮方よりおまが左様と法師
さね年明の春ごろ。おまが別所宅でも持し七あ
様。あつた張る様で仕するつと。おまが言のつと。おまが
会ふのつと。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も

るの仕形。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
と見よ。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
明のつと。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
私のおまが。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も
おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も様も。おまが様も

悔ふら一書二言ア多減があらはしつゝの物圓いも
 法精が身の変りする悲しき切き。法助の多きて
 世とつとせやんとするせ法精のまうらま。更其の法精の
 言ひつゝも山山の。さうとゆふて。法精の物
 り長けむとふ説む巻を極て分解さへ
 新書言法精が所なるる方々の計策者官
 末摘花四編巻之下下

神皇御藥
 神僊神明湯

一廻り分代銀六匁
 一包代百銅

善阻み下つゝえ食まきまきん何とさうとら
 病後たりのいさ
 病後たりのいさ
 病後たりのいさ
 病後たりのいさ
 病後たりのいさ

神仙廣徳丸

一包百銅
半包四十八銅

牙小児万病の薬なり五かんきを風入すは小児のうらり
てんかんのまきつあつたをひきまるといふかすまふ海を成ん
一といえんをまきつをとりく又あくのむしをとりくは
あつたのあつたをまきつをとりく又あくのむしをとりくは
あつたのあつたをまきつをとりく又あくのむしをとりくは
あつたのあつたをまきつをとりく又あくのむしをとりくは

三國一風薬

一あ十あわり
百二十四錠

神話合所

次取 東約三糸通 大尋子屋綱常 各屋 永平屋 永平屋 永平屋 永平屋
江戸 丁子屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋
山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋 山崎屋



